

スンダ（西ジャワ）の貴族（menak）について

田 中 則 雄*

The Menak, Sundanese Nobles in West Java

by

Norio TANAKA

は じ め に

インドネシアは多くの民族から構成され、そしてそれぞれの民族が各自の言語、文化、社会、歴史、慣習法のもとに生活している。インドネシアの中心で、インドネシア人口の64パーセントが住むジャワ島においてさえ、東部の一部とマズラ島にはマズラ人が、東部から中部にはジャワ人、そして西部にはスンダ人が住んで、それぞれ異なった社会を形成している。

インドネシアにおいて、政治的、文化的に最も大きな影響力を持っているのは、言うまでもなくジャワ人であるが、ジャワ人について、勢力を持っているのがスンダ人である。

このスンダ人の社会を過去において、指導してきたのが、スンダの貴族、メナック（menak）であった。

私は1969年から71年にかけて、スンダ各地をしばしば訪ねてみたが、独立後20数年をへ、その間に多くの変革を受けたにもかかわらず、今日なおメナックはスンダ社会に大きな勢力を持っていた。

メナックがなぜこのように、過去から現在にかけ、大きな勢力をスンダ社会に持ちつづけることができたのか、考察してみたいと思う。¹⁾

I スンダ地方とスンダ人

スンダ地方、すなわち西ジャワ地方は、北部のジャワ海寄りには海岸平野がひらけているが、中部から南部にかけては山岳地帯におおわれている。この山岳地帯の諸高原と山麓地帯が、冷涼な気候、肥沃な火山灰土壌、および乾季にも十分な雨量に恵まれることなどと相まって、現

* 東京都立紅葉川高等学校

1) スンダ各地を案内し、そして多くのメナックを紹介してくださった Dr. Ir. D. Swandhi, Harry Saffiudin, Sufia Isa の諸氏および、貴重な資料をみせてくださった Jajasan Pangeran Sumedang の R. A. Surianata Kusma, Samdja の諸氏に深く感謝する。

在ではインドネシアでも最も豊かな農業地帯となっている。乾季に赤茶けた中部ジャワから西部ジャワに入り、青々した水田に接するとこのことが良く理解できる。

ジャワ島では一般に気候が良く、水に恵まれた山麓地帯からひらけ、暑くて瘴癘の地である海岸平野の開拓は遅れた。海岸平野がひらかれるようになったのは、貿易がさかんになってからであり、それも河口の海港都市からであった。

現在でもジャワ島に関しては、農業地帯として豊かなのは雨量の多い山麓地帯であり、灌漑設備が乏しく、そして乾季に雨が降らない北部平野の農村は一般に貧しい。

自然条件に恵まれたスンダ地方の、しかもサラク (salak) 山麓の涼しくて、雨量に恵まれたボゴール (Bogor) 地方²⁾にインドネシア最古のヒンズー文化のタルマ (Taruma) 国³⁾が誕生したのも決して偶然のことではない。

しかしこのヒンズー文化の中心は、その後中部ジャワへ、そして東部ジャワへと遷り、スンダ地方はジャワ史の圏外におかれてしまった。

そして16世紀、回教時代に入って再びジャワ史の舞台に登場してくるが、この間のスンダ史については、ボゴールとその南のチバダ (Tjibadak)⁴⁾および東スンダ地方のカワリ (Kawali) [チアミス (Tjiamis) の北, 20km] 付近にあるわずかな碑文と口碑伝承にたよらなければならない。これらによってタルマ国の後にスンダ国、その後にパジャジャラン国が存在し、また東スンダのチアミス付近⁵⁾にガル (Garuh) 国が存在し、パジャジャラン国と密接な関係があったことが推定されている。

これらはいずれもヒンズー王国であったが、その遺跡からみる限り、いずれも小規模なものであり、中部および東部ジャワのヒンズー遺跡とは比べものにならない。⁶⁾

しかしいずれにしてもスンダ地方が、西はボゴールを中心とした地域より、また東はチアミスを中心とした、いずれも自然条件に恵まれた、気候の良い、豊かな山麓地帯よりひらかれていき、そして徐々に、長年月をかけて、内部の諸高原が開拓されていったものと考えられる。

16世紀、回教王国のパンテン、チレボン両王国の勃興により、パジャジャラン王国は滅され、東スンダはマタラム王国の支配下に入ったが、オランダ東インド会社の登場により、18世紀初頭、スンダ地方のほとんど大部分はオランダの支配下に入った。しかしオランダ側の報告

2) ボゴールは「雨の町 (kota hudjan)」ともよばれている。

3) ボゴールの近くのチアンペア (Tjiampea) に5世紀頃のものと考えられるタルマ国の碑文がある。

4) Tjibadak の町に入る手前の Tjitjatih 川沿いの小高い丘の上に、1030年のスンダ王 Maharaja Çri Jajabhupati の碑文があった。しかし現在ここにはなく、古老の話では博物館に納められたとのことである。

5) 現在でもスンダ地方で最も豊かな水田地帯であると言われている。

6) 独立後、スンダ地方のヒンズー遺跡の発掘がさかんである。筆者はガル (Garut) 高原のレレス (Leles) 付近のチャンデイ・チャンコアの発掘現場を訪ねてみたが、非常に規模の小さいものだった。ヒンズーの石像もスンダ各地にいくつも散在しているが、筆者の見たものはいずれも小さなものであった。

によると、この時代、この地方はまだ人煙全く稀で、人口も稀薄であったと言うから⁷⁾、諸高原の開拓はまだ充分進んでいなかったものと思われる。この地方の開拓が進み、人口も増加し、文字通り豊饒の地になったのは、オランダの支配下に入ってから後のことである。

スンダ人の人口は1966年で約1700万人と推定されるが⁸⁾、これはジャワ人につぐ人口数で、それだけにジャワ人に対する対抗意識は強い。ジャワ人とスンダ人との対立はすでにオランダ人も早くから指摘しているところであるが、スンダとジャワとの境界を流れるブレベス（Brebes）の近くのチ・プマリ（Tjipemali）川がスンダ人にとって「禁断の川」を意味し、スンダ人がこの川を渡ると神霊の意に反して、不幸になると言い伝えられていることからみると⁹⁾、かなり古い昔から対立があったものと考えられる。

スンダ人とジャワ人を比較するとスンダ人のほうがスンダ美人に象徴されるように、一般に色が白い。住居もジャワ人の土間式に対して、スンダ人は高床式であり、集落もジャワ人のようなきちっとした集村でなく、不規則でかなり分散している。そして村落の共同体規制もジャワのように強くなく、とくに土地に対する規制が非常に弱いため、ジャワ島の中で、最も大土地所有制の発達したところとなっている。

II スンダ社会とメナック（menak）¹⁰⁾

ジャワ社会については、プリヤイ（priyaji）〔ジャワのマタラム王国やその他の小君主たちに仕える廷臣とその家族たち〕とサントリ（santri）〔ジャワ住民のうちでイスラム教への関心が最も強いもので、主として商工業者〕およびアバンガン（abangan）〔精霊信仰の名残りを幾分とどめた農民〕の三社会集団に分類したクリフォード・ギアーツ（Clifford Geertz）の研究が有名である。この研究は1951年から1954年にかけておこなわれた東ジャワの実態調査をもとにしたものであるが、ちょうどこの調査が行なわれていた同じ頃、スンダ社会をアリシャバナ

7) 戸数一万戸足らずであったと言う。

拙稿「オランダ東印度会社の西ジャワにおける義務供出制について」『南方史研究Ⅱ』南方史研究会、1960、pp. 116～117）参照。

8) インドネシア中央統計局の発表によると西部ジャワの人口は、1966年末で23,162,000人である。（谷口五郎『インドネシア』改訂版、鹿島研究所出版会、昭和45年、p. 105）これからジャカルタ、チレボン、クラワン、バンテン等に居住の非スンダ人の人口を引けば、スンダ人は約1700万人位と推定される。なお1930年の国勢調査では西部ジャワの人口は1,140万（ジャワ・マズラ全体で4,078万）で、その内、スンダ人は846万人である。（『南方年鑑』昭和18年版、東邦社、昭和18年、p. 832, 842）なお、スンダ人の人口増加の状況を示すと、1895年2,195,000人、1900年2,436,000人、1905年2,697,000人、1915年3,000,000人である。（S. Alisjahbana. *A Preliminary study of class structure among the Sundanese in the Priangan*. 1954, p. ii）

9) W. Fruin-Mees, *Geschiedenis van Java*, 1920, p. 5. 松岡静雄訳『爪哇史』岩波書店、大正13年、p. 5。

10) menak は中世ジャワの戦士に対する尊称であるが、これがスンダに入って貴族の称号となったと言う。（Ailsjahbana 前掲書 p. 1 脚注）

(Semiati Alisjahbana)¹¹⁾が研究し、1954年「プリアンガンにおけるスンダ人の階級構成研究序説 (A preliminary study of class structure among the Sundanese in Priangan)」なる修士論文をコーネル大学に提出した。

女史はこの中で、ジャワ、スンダいずれの社会も貴族(ジャワでは prijaji, スンダでは menak)と農民(ジャワでは wong tjilik, スンダでは djalma leutik)に明瞭に分けられるとし、スンダ社会を貴族 (menak) と農民 (djalma leutik, tjatjah) の2集団に分類し研究をすすめている。

ギアーツの3集団によるジャワ社会の分類はこの後に発表されたのであるが、スンダ社会に関しては、なお依然としてアリシャバナの分類が妥当であると考ええる。それはスンダにおいてはジャワのようにサントリをプリアイやアバンガンに対する一つの社会集団として認めることは困難であり、またジャワのサントリが果たしているような社会的役割はスンダではメナックが果たしていると思われるからである。

スンダのメナックはジャワのプリアイほどヒンズー的要素は強くない。彼らはジャワ文化に憧憬の念をいだき、20世紀初頭までマタラム王国に伺候し、社会的地位の象徴としてジャワ語を使用していたほどであるが¹²⁾、ヒンズー的要素はジャワのプリアイに比較すれば非常に少ない。むしろ宗教的にはスンダ地方はジャワ島の中で最も回教の盛んな所で、そしてその回教の指導的役割をメナックが果たしているのである。¹³⁾ またジャワのサントリが果たしているような商工業者としての経済的役割をもまた、土地所有者で経済力のあるメナックが果たしている。¹⁴⁾

ジャワのプリアイもスンダのメナックもともに、先祖を王侯や、地方土侯に持つ伝統的な家系と高い官職に由来するものとして理解されているが¹⁵⁾、どちらかと言えば、ジャワのプリア

11) 女史の消息につき、バンドン教育大学社会人類学教授 Harsojo, S. S. 氏に聞いたところ、病気でなくなったとのことであった。

12) Alisjahbana. 前掲書 pp. 6～7。筆者はスメダンでメナックの伝統芸能を見せてもらったが、それはジャワ・ヒンズー的なものであった。またバンドンの南、ソレアン (Soreang) でメナックに会った時、そのメナックも昔メナックはジャワ語を使用していたと語っていた。

13) スンダではメナックは最も熱心な回教徒であり、そしてモスクや回教学校 (pesantren) の維持にあたっている。筆者はガルートやスメダンでこのような状況を見聞することができた。

14) これらの点につき実態調査を行なえなかったことを残念に思っているが、チカジャン (Tjikadjan) (ガルートの南) で会ったメナックは大土地所有者で農園、製茶工場、養蚕工場等を経営し、同時にモスク、回教学校を持っていて、ハジであった。またバルブル・リンバンガン (Balubur-limbangan) (ガルートの北) のメナックも小規模ではあるが商店を営んでいた。

バンドンの北、チボダス (Tjibodas) の大土地所有者は農園経営の他に金融業およびバス、トラック等の運輸業を営んでいる。(Ir. H. ten Dam, "Coöpereren vanuit het gezichtspunt der desastructuur in desa Tjibodas," *Indonesië* IX, 1956. pp. 100～101. この英訳が *Indonesian Economics*, 1961 に載っている。)

筆者はバンドン教育大学社会人類学の Harsojo, S. S. 教授とこれらの点について話合った時、教授もスンダのメナックはジャワのサントリが果たしているような社会的役割をも果たしており、スンダはメナックと農民の二集団に分類するほうが妥当であると話しておられた。

15) C. van Vollenhoven, *Het adatrecht van Nederlandsche Indië*, 1931. p. 706.

イは官吏としての色彩が濃厚であり、これに対してスンダのメナックは伝統的家系をもつ貴族としての意味のほうが濃厚である。これはジャワではレヘント（regent, 土侯）以下の諸役人、19世紀初め、ダーンデルス(Daendels)、ラフルス(Raffles)、全権委員(Commissaris generaal)らにより、その領主的性格を抑制され、オランダの土着民官吏化していったのに対して¹⁶⁾、スンダではコーヒーの義務供出制による莫大な収益が政庁の財政を支えたため、自由主義政策は実施されず、プレアングル制度（Preanger stelsel）（1677—1871）のもとに、レヘント以下諸役人の領主的性格は温存され、ジャワに比べ土着民官吏化が遅れたためである。

スンダのメナックがいつ成立したかについては良くわからないが、パジャジャラン王国時代、各地に後のレヘント（土侯）の前身と考えられるものが成立したものと思われる。後世、彼らはいずれもパジャジャラン王の末裔であると称している。¹⁷⁾

パジャジャラン王国滅亡後、マタラム王国の支配下に入った時、マタラムはこの在地有力土侯をブパティ（bupati）に任命し、彼らに統治させた。オランダ東インド会社の統治下においても、会社は住民の統治をこれら土侯（オランダはこれをレヘントとよんだ）にいっさいまかせ、コーヒー等の輸出商品の栽培と供出を彼らを通じて行なわせた。¹⁸⁾ 会社倒産（1799）後もこのプレアングル制度（1677—1871）は存続され、これら土侯の性格に変化はおこらなかった。

この土侯、すなわちレヘント（regent）は世襲され¹⁹⁾、彼らのもとに執政（patih）、郡長（wedana）、副郡長（tjamat, asisten wedana）らの諸役人がいて彼らを助けた。これらの役職はいずれもレヘントの一族、およびその子孫によって占められた。

そこでこのレヘントを頂点とした一つの同族集団が各地に成立し、それが官職と結びつき、そしてまた、彼らはお互いに婚姻を通じて結びついていったので²⁰⁾、彼らはスンダ社会に一つの上層社会集団としてのメナック階級を形成していったのである。

メナックの象徴としては（1）称号とそれにとみなう官職、（2）プサカ（pusaka）、（3）メナックにふさわしい生活と生活態度等があげられる。称号はマタラムより与えられるものと、オランダより与えられるものがある。メナックの最高の称号は Pangeran（皇太子の意味で、スメダンのレヘントのみこれを称した）で、Raden（レヘントの最も普通の称号）、Adipati（オランダ

16) 一時ジャワ戦争（1825-30）や強制栽培制度の実施（1830）のため、オランダはレヘントの協力を得るため後退させたが、強制栽培制度への批判が高まるにつれ、再び土着民官吏化が進められた。

17) Van Rees, *Overzicht van de Geschiedenis der Preanger Regentschappen*, 1867. p. 10.

18) この点については前掲拙稿を参照されたい。

19) レヘントの職は法的にはオランダの任命であったが、実際には政策上の配慮から世襲が認められた。この世襲が廃止されたのは1913年である。

20) スメダンのレヘント家の系図（1968年作成のもの）によれば、スンダの各レヘント家が互いに婚姻により結びついていることがわかる。スメダンではとくにバンドン、チャンジュール、リンバンガン、ガルートのレヘント家との関係が深い。

マックス・ハーフェラール（Max Havelaar）によれば、19世紀中頃のルバック（Lebak）とチャンジュールのレヘントは一族である。（Multatuli, *Max Havelaar*, 14e druk. 1932. p. 147. 朝倉純孝訳『マックス・ハーフェラール』タイムス出版社、昭和17年、p. 188.）

の中將に相当する), Ranga(普通執政や郡長に与えられる), Ngabehi, Temenggung, Demang の順でこれに続く。Raden の息子は Aom, 娘は Djuag である。女性の最高の称号は夫人で Raden Aju, 娘で Raden Adjeng であるが, これらはいずれもジャワ起源であって, スンダ語では Nji dalam, Nji temenggung, Nji wedana である。最低の称号は Mas で下級貴族 (Santana) が一般にこれを称した。²¹⁾

プサカ (Pusaka. 世襲の意) は, いわば日本の三種の神器のようなもので, 呪力があると考えられ, 代々世襲された。スンダ, ジャワいずれも, クリス (短剣), 槍, 傘, 楯, 装身具等である。²²⁾ メナックの生活と生活態度は, その立居振舞, 礼儀作法等においていずれもジャワのプライイの影響を非常にうけている。

III メナックの権威の精神的基盤

メナックの精神的権威の源泉は超自然的な力があると考えられるその貴種にある。現在でもある特定のレヘントの墓はその土地の人々の信仰の対象になっている。²³⁾ だからこそまたその象徴としてのプサカが呪力あるものとして尊重されたのである。この貴種尊重はプサカとともに家系図を尊重することになる。²⁴⁾ この系図についてはオランダも早くから注目し, 19世紀なかば, スメダンとスカプラ (Sukapura) で副理事官をつとめた A. W. Kinder de Camarecq は, 勤務地のレヘントの系図を報告している。²⁵⁾

筆者はスカプラ, リンバンガン, スメダンの三カ所のレヘントの系図を見ることができたが, この中でスメダンのものが最も詳しくて完備していた。スメダンのレヘント家はスンダでも最も家格が高く, 称号もマタラム王から最高のパンゲランを与えられた唯一のレヘント家である。かつてマタラム王がこの地を支配した時, まずスメダンのレヘントに東スンダ全体の統治をまかせたくらいである。現在でも, パンゲラン・スメダン財団 (Jajasan Pangeran Sumedang) をつくり, まだ多くの土地を保有し, 一族の教育資金や伝統文化の保存にあて, その地方で大

21) Alisjahbana, 前掲書 p. 19~20.

22) 筆者はスメダンでプサカを見せてもらったが, 宝石をちりばめた黄金作りのクリスや冠, 装身具であった。

プサカは疫病や旱魃の予防にも役立つと考えられ, 場所によっては住民のために行列が行なわれ, またプサカを洗った水が病気に効くとも考えられていた。(Alisjahbana, 前掲書, p. 21)

23) 筆者はスンダで各地のレヘントの墓を訪ねたが, リンバンガンの Raden Widjaja Kusmah, スメダンの Pangeran Suria Kusmah Adi Nata I (1836~82在位), およびチアミスのあるレヘントの墓は, その土地の人々に尊崇され, 種々な祈願の対象となっていた。とくにスメダンの前記レヘントは財産や奥さんや子供 (94人) に恵まれていたので, これらの欲しい人はこの墓に祈願するとのことで, 墓地の中でもとくに白布で囲まれていて, 特別なあつかいをうけていた。

24) ほとんどの家は Salsilah (家系図) を持ち, その家の重要事項を特別な本 (普通は宗教書) に書きこんだ。(Alisjahbana, 前掲書, p. 33. 脚註)

25) A. W. Kinder de Camarecq, "Stamlijst der regenten van Soekapoera, in de Preanger Regentschappen, tot 1858" "Stamlijst der regenten van Soemedang, in de Preanger Regentschappen, tot 1858" *Tijdschrift voor Indische Taals-, Land-en Volkenkunde*, XI. 1862. pp. 159~160.

きな力を持っている。

スメダンのレヘント家の詳細な系図は、1968年パンゲラン・スメダン財団によって作成されていたが、この系図は「スメダン史（Sudjarah Sumedang）」をもとに、各地のレヘント家の系図とオランダ人、インドネシア人歴史家の研究を参照しながら作成されてあった。基本とな

表1 スメダン史（Sudjarah Sumedang）

Kolom 1. Nabi Adam より Pangeran Santri Tjirebon まで	
<i>Nabi Adam</i> a. s.	
1 Nabi Sis	29 Iljas
2 Anwas	30 Abu Tolib
3 Panad	31 Adjimah
4 Mutackil	32 Inatah
5 Madjid	33 Tapur
6 Nabi Idris a. s.	34 Pangir
7 Sulha	35 Golib
8 Suhara	36 Abudul Manap
9 <i>Nabi Noh</i> a. s.	37 Hasjim
10 1. Hasjim	38 Abdul mutalib
2. Baginda Sjah	39 1. Abu Tolib
11 Said, Hasjim の子	2. Abdullah
12 Patja	40 <i>Kandjing Nabi Muhamad</i> s. a. w.
13 Ranga	41 Dewi Patimah, Sajjid Ali の妻
14 Saruh	42 Husen
15 Pachir	43 Djenal Abidin
16 Azar	44 Ratu Banisraib Sjah Djenal Kubro
17 Nabi Ibrahim a. s.	45 Radja Juta Sjah Djumadil Kubro
18 Nabi Ismail a. s.	46 Radja Mesir Sjah Nadjmudin
19 Shabit	47 <i>Sunan Gunung djati</i>
20 Jadjib	48 Pangeran Pasarean
21 Jarab	49 1. Ratu Petah
22 Pachur	2. Pangeran Balega
23 Nanah	50 Pangeran Pandjunan
24 Mangis	51 Pangeran Pamereharan
25 Oedadi	52 <i>Pangeran Santri</i>
26 Mulid	Sunan Tuakan の娘 Njimas Patuakan
27 Nadjar	と結婚した Sunan Tjorenda の娘,
28 Mular	Putjuk Oemoem と結婚す。

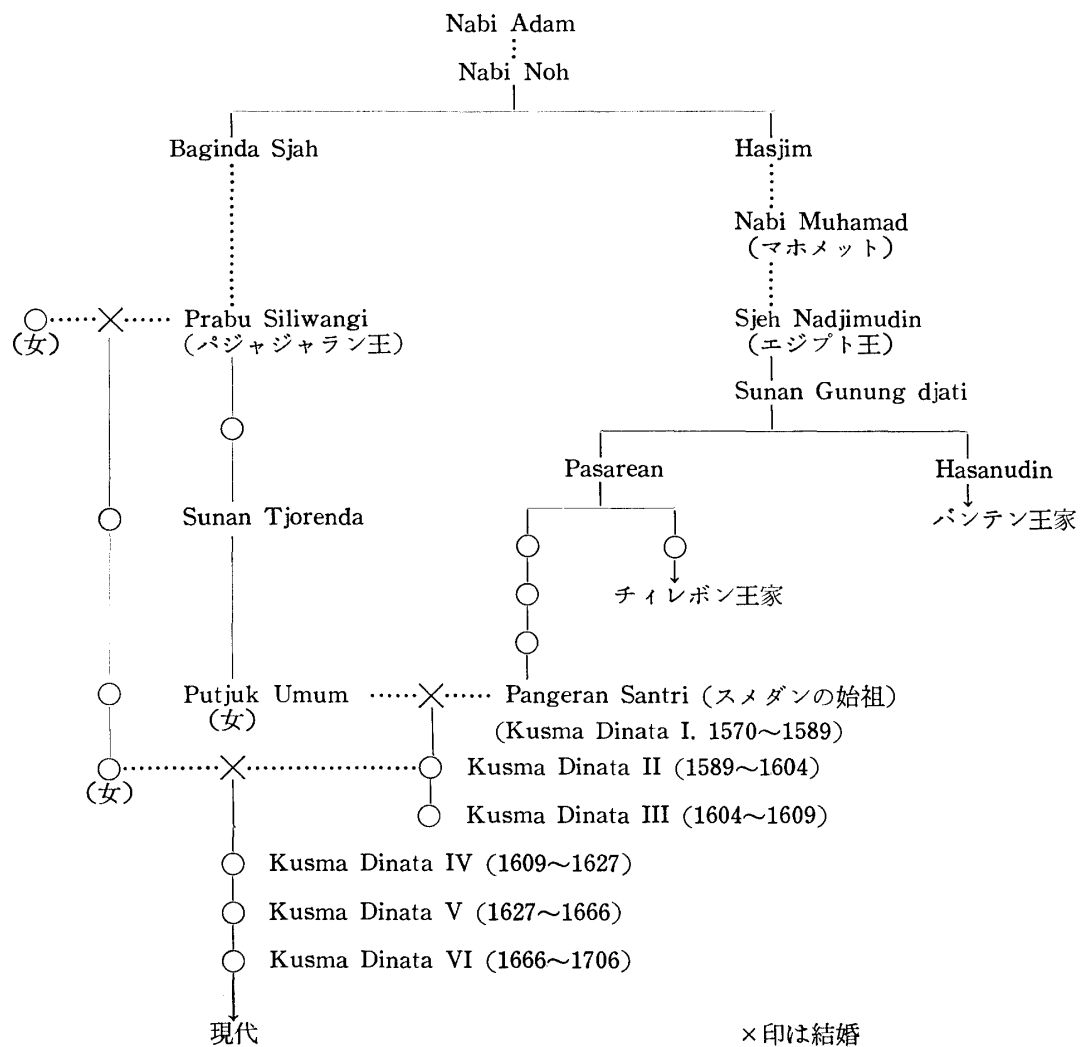
注：Nabi=預言者。Kandjing=王。Kolom 2 は Nabi Noh に始まって Siliwangi となる。

Nabi Noh=ノア。 Kandjing Nabi Muhamad=マホメット。

った「スメダン史」は昔のレヘントの邸宅の一部の一室に保存されてあったが、これは1901年アラビア書体で筆写された詳細なレヘント家の系図であり、また戸籍でもあった。そしてこれはアラビア書体であるためか、1919年にローマ字化され、さらに1901年以後が補足されてあった。1919年本で、1巻133ページ、2巻53ページの大部のものであり、スンダ語で書かれてあった。

「スメダン史」(表1・図1参照)によると、スメダンのレヘント家はチレボン王室出身のパングラン・サントリ (Pangeran Santri) とパジャジャラン王の子孫(女)との結婚によってできたものとしてある。このことはチレボン王国の勢力がこの地にのびて来て、土着勢

図1 Sumedang 家系図
(Sudjarah Sumedang より作成)



力と結合したことを意味するであろうが、同時にまたこの地の回教がチレボンより入ってきたであろうことをうかがわせる。これはチレボンに隣接する地域として、地理的にも充分考えられることである。

しかしここで注目すべきことは祖先をマホメットとしていることである。すなわち「スメダン史」第1ページは Nabi Adam (Nabi は預言者) から始まって Nabi Muhammad になり、チレボン、バンテン両王国の始祖 Sunan Gunung Djati, そして Pangeran Santri となり、第2ページに入って、バジャジャラン王、シリワンギ (Siliwangi) が出てくるが、このシリワンギもまた、Nabi Adam の9代目の子孫 Nabi Noh の第2子 Baginda Sjah を先祖としている。すなわち預言者マホメットの子孫が、同じく預言者ノアの子孫であるバジャジャラン王の末裔の娘と結婚してスメダン家ができたようになっている。

これが1968年作成の系図ではスンダのガルー王朝を中心にして、その子孫のシリワンギ王の曾孫(女)が、エジプト (Mesir) 王の子孫であるチレボン王室出身のパンゲラン・サントリと結婚したように表現され、回教の預言者たちに結びつけていない。すなわち「スメダン史」は回教預言者の子孫であることを強調し、1968年の系図はスンダ人の間に伝承されている民族的英雄シリワンギ王の子孫であることを強調している。

スンダのレヘントがこのように先祖をマホメットとし²⁶⁾、このことを強調したことは、この地への回教の浸透と相まって、レヘントが従来もっていたアニミズム的権威(超自然力を持っていると言う)と、王は神の化神であると言うヒンズー的権威(シリワンギ王の子孫であることによって)に、さらに回教のカリフ的権威を加えたことになる。

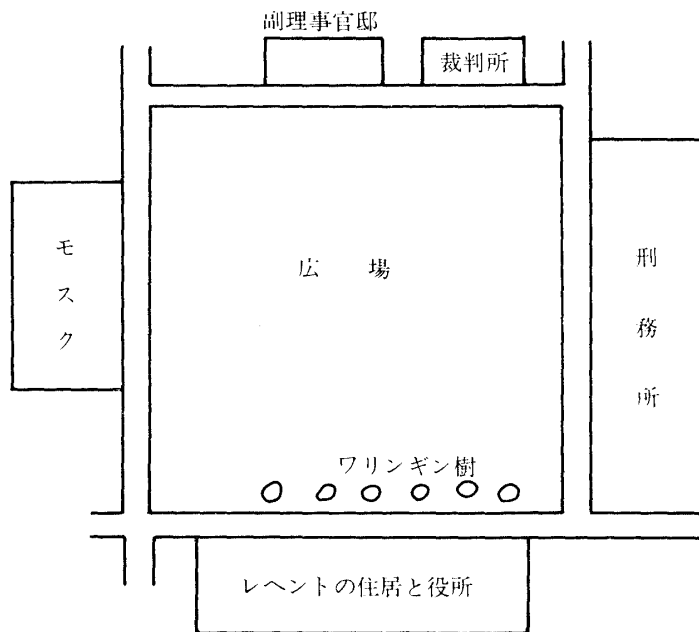
事実、レヘントはオランダの一土着民官吏と化するまでは、単に行政上の長であったばかりではなく、宗教上の長でもあった。²⁷⁾ だからこそ、宗教税であるジャカト (Djakat, モスクや聖職者に納める) やピトラ (Pitrah, 断食終了時に納める) の一部を徴収する権利を持っていたのである。また彼らの住居と役宅は、必ず聖樹ワリンギンの繁る広場 (alun-alun) を中心にした南側におかれ、西側にはモスクを配置している。(図2参照) そして彼らの部下、郡長 (wedana), 副郡長 (tjamat) もまたこの形式になっている。

すなわち政教一致と同時に、彼らがその長であることを形の上で示しているのである。レヘントがこのような権威を持っていたからこそ、オランダは法的にはレヘントの任命権を持ちながらも、彼らの世襲を認め、新たにレヘントスハップ (regentschap, レヘント統治県) を設置

26) チャンジュールのレヘントの先祖 Wiranatanudatar I (1557 没) はシリワンギ王の子孫で、彼の母はチレボン王室の始祖 Sunan Gunung Djati の娘であるとしている。(Alisjahbana, 前掲書 p. 33, 脚注) このようにスンダではほとんどのレヘントが、先祖をシリワンギ王とバンテンやチレボンのスルタンにしているので、マホメットを先祖にすることができる。

27) S. Kalf, "Javaansche hoofdamttenaren" *Kolonial Tijdschrift*. 9, 1920. p. 507.

図2 レヘントの住居
(スメダンの例)



した時でも、彼らの一族からレヘントを任命し²⁸⁾、植民地統治に利用したのである。

1904年、ブーカ (Boeka) は「インド入門 (De Indische Gids)」誌上において「ジャワの首長 (De hoofd op Java)」について論じているが、彼はその中で、「その地方を支配していたレヘントの一族でなく、博学と西洋的知識によって政府に任命されたレヘントは、住民に首長として認められるようになるのに非常な努力と時間が必要である。それでもレヘントの一族ほどの勢力を持つことはできない。そして侮辱されたと考える貴族や、その他の不満分子が復讐を考えるようになる。しかし他の出自のレヘントも政府の手厚い保護と与えられた権力によって、表だって住民から軽蔑をうけることはない。」と言って²⁹⁾、伝統的首長が依然として住民に尊敬されていることを述べている。

一般のメナックも以上のような精神的な権威をもっているレヘントの一族であるがゆえに、住民から尊敬の念をもってむかえられたのである。だからこそ、オランダは一般土着民官吏をメナックから多く採用したのである。1940年においてもなお、スンダの女流作家³⁰⁾は、「高級役人の子孫で、貴族の称号を持っている者が、教師でかつ住民の教育的発展につくしている者より、住民から尊敬され、要求されている。」と書いている。

28) 20世紀に入ってから、オランダはスカブミ (Sukabumi) に新しい regentschap をつくったが、そのレヘントにスメダンのレヘントの一族を任命した。

29) "De Hoofd op Java, een studie door Boeka," *De Indische Gids*, 26, 1904, p. 335

30) Qiwarsih Djojopuspito, "Buiten het Gareel," *Vrij Nederland*, Amsterdam, 1940 (Alisjahbana, 前掲書 p. 15)

しかしオランダのレヘント等の土着民官吏化が進み、彼らが単なるオランダの役人と化し、宗教的権威を失うにつれ、一般のメナックもまた精神的な権威を徐々に失っていったのである。

IV メナックの権威の経済的基盤

メナックの権威の政治経済的基盤はすでに述べたように、政治権力すなわち官職に結びついている点にある。メナックでなければ役人になれなかったのである。このことは後年、オランダが身分でなく、学校教育をうけたものから土着民官吏を採用するようになって、教育をうける機会に恵まれたメナックが、やはり多数を占めて、そこに大きな変化はおこらなかった。1925年、ジャワ島全体の執政（patih）、郡長（wedana）399名中、非貴族は166名（40％）で、他は全部、貴族であった。³¹⁾

それゆえ、メナックの権威を支える経済的基盤の第一は官職にともなう収入である。

スンダの農民は彼らの領主であるレヘントその他の首長（hoofd）に対して、夫役と貢納の義務があった。夫役にはまず職田（ambtveld）での労働があった。職田は役人の俸給として役職に付随するものであるが、役職はしばしば世襲化されたので、職田は役人の私有地化することが多かった。その他には首長の邸宅の手入れ、道路普請、供奉等があった。

貢納には収穫の二十分の一を納めるチュウク（tjuka）があった。レヘントはこのチュウクと職田のそれぞれ一部を配下の役人に分かち与えたのである。

レヘントはまた回教の長でもあったから、すでに述べたように宗教税の djakat と pitrah の一部を自己の収入とした。このほか、水牛の売買および屠殺税、通行税、渡船税等がレヘントに納められた。そしてメナックはレヘントの一族としてそれぞれのレヘントのもとで役職を与えられ、収入の道を得たのである。

しかしレヘント以下諸役人達にとって最大の収入となったのは、コーヒーの義務供出制ともなうものであった。彼らはオランダと農民の間にあって、莫大な収益をおさめた。³²⁾

しかしこのような収入も、プレアンゲル制度の廃止（1871）とその後の土着民官吏化政策の進展につれ、これら領主的特権は消滅させられ、失われていった。

メナックの経済的基盤の第2は、土地所有によるところのものである。オランダ東インド会社時代、スンダのレヘントおよび郡長ら有力者達は義務供出制の負担に耐えかねて、逃亡してきた農民を自己の手もとに受け入れ、隷農（menunpang）として開墾と耕作にあたらせた。³³⁾

31) Alisjahbana, 前掲書 p. 15.

32) 前掲拙稿を参照されたい。

33) 東インド会社時代末期にはスンダの農民の過半数は隷農（Menunpang）となった。（前掲拙稿 p. 123）。この数字はジャワ島全体についてであるから貴族にはジャワのプリアイとスンダのメナックの両方が含まれている。

この当時、スンダ（プリアンガン）地方はほとんど荒蕪地におおわれていたので、労働力を獲得したこれら有力者達は開墾して所有地を拡げていったのである。会社崩壊後もこの傾向は続き、こうしてメナック達は大地所有者となっていたのである。

1904年、ケルン（R. A. Kern）は「インド入門（De Indische Gids）」誌上で「プレアングルの状況、大地所有」、すなわちスンダ地方の大地所有について論じているが、その中で彼は、この地方の大地所有の原因について、次のよう言述べている。³⁴⁾

- (1) 同郷人の購入による。
- (2) 荒蕪地の開墾による。これは後に法律により制限されたが、他人名義で開墾が行なわれた。
- (3) 荒蕪地にコーヒーを植え、また5年後には世襲的個人占有地にしてもらうと言う条件で政府の農園を維持管理することによって。このような方法で1872年から1884年の間にいわゆる「独立農園（mërdika-tuinen）」ができた。しかし、土地を拡張してコーヒーを植えたり、また維持する手段を持っているのは、富裕な土地所有者に限られていたので、これらの土地の大部分はこれら富裕な土地所有者の手に入った。これらの土地は初めは当然畑であったが、後に一部は水田に改められた。
- (4) 山嶽地帯で、主として畑、水田を略奪すること（spoliatie）によって。とくに1870年以前はまだ荒野で、その後急速に水田化していったバンドン高原において。

以上4点を大地所有成立の原因としてあげているが、現在（1904年）では(1)の同郷人からの購入が最も重要な原因であるとし、大地所有拡大の原因を純経済的なものに求めている。

しかし彼は大地所有者として、(1)レヘントの一族（regentengeslachten）、(2)土着貴族（landadel）³⁵⁾、(3)村人（desalieden）の三者をあげ、(1)と(2)、すなわちメナックが大地所有者の主要構成員であることを示し³⁶⁾、さらに「土着民官吏はレヘント一族および、土着貴族であったが、しかしこれらの人数が官吏の数を上回ったため、最近では最も有名な家族でないとなれない。そこでレヘントの家族の一員以外の土着貴族は官吏への道を閉ざしてしまった。たとえあっても収入が少なく、名譽的なものであった。土着民官吏の数の停滞は、それから閉め出された大地所有者をして、さらに土地の拡大と改良に心を向けさせた。彼らは耕作に対して愛情を持ち、また手段も所有し、勉学の意欲があり、教養があり、発展進歩に対して、一般

34) R. A. Kern, "Prijangansch toestand; t'Grootgrondbezit," *De Indische Gids*, 26. Ⅱ, 1904. pp. 1817～1824)

35) 在地化したメナック。

36) Alisjahbana はスンダの大地所有の基本的な原因として、土地の個人的占有権と非村民に対する土地の自由譲渡をあげ、大地所有者としては、(1)メナックの家族、(2)富裕な村民、(3)商人、(4)ハジ（hadji）をあげ、土地はメナックにも農民にも良い投資として考えられたとのべている。（Alisjahbana, 前掲書 p. 53）

大衆よりはるかに有能であった。」とのべ、さらに大土地所有者は開拓者として、また国民ので果たしてきた役割を高く評価している。

このようにメナックは大土地所有者としての経済的基盤を持っていたので、メナックの身分が官職と結びつかなくなった後においてもなお、大土地所有者として農民に対して権威を維持し続けることができたのである。

耕作に対する道案内として有益であるとし、メナックが大土地所有者として、また開拓者とし

お わ り に

現在メナックは 伝統文化の継承者として 以外の身分的、精神的権威は失ってしまっているが、権威の経済的基盤の一つであった土地所有については、1960年の土地改革にもかかわらず、彼らはなお依然として土地を保有し、土地所有者であることには変わりはない。しかし、分割相続で、しかも子どもが多いため、一般的にはかなり細分化されているようである。また彼らは教育に熱心で、経済力があるので、子弟に高等教育をうけさせているため、中央、地方の官庁ではなお依然として彼らは勢力を持っている。